

<研究資料>

阪神地域における余暇生活文化 ～ 大正期の遊覧書から

田島 栄文<sup>1</sup>

**A report on the culture of leisure life in Hanshin area**

**— From sightseeing guidebooks in the Taisyo Era —**

Yoshifumi Tajima<sup>1</sup>

**Abstract**

Nishinomiya-City was established in April 2008 as the quasi-government-decreed city. After the big earthquake of Hanshin-Awaji in 1995, Nishinomiya is continuously increasing its population. One of the reasons for its' density might be a fulfilling leisure life in this area. So I would like to study "the culture of leisure life" and examine collaborative policy of university and NPO as a local community. First I refer to historic background of leisure life in Nishinomiya and Hanshin area, consulting sightseeing guidebooks published during the Taisho Era.

Offering people in the Kinki region for day-trips or overnight-trips, these books had some index for finding out railway stations or railway lines, well-traveled routes and destinations. Books introduce also many tourist spots and amusement facilities besides shrines and temples to visit. This kind of guidebooks began to issue a lot in those days and had been popular among the people seeking leisure and amusement.

**1. 緒言**

兵庫県西宮市は、2008（平成 20）年 4 月中核市に移行した。“文教住宅都市を基調とする個性的な都市”の建設を基本目標としてまちづくりを進めてきた本市は、人権・平和・文化・芸術・生涯学習、教育・福祉・保健・医療・防災・防犯、環境・景観・都市整備、学術・観光・産業といった様々な分野で連携・協力しながら一層の発展を図るとともに、物質的な豊かさだけではない、心の豊かさを感じることでできるまちの実現を目指すことをうたっている。<sup>1)</sup>

1995（平成 7）年の阪神・淡路大震災の甚大な被害を乗り越え、様々な課題を抱えながらも、本市が阪神都市圏にあって人口増加を続けている理由の一つに、観光・文化・芸術・生涯学習・スポ

ーツ・レクリエーション・野外活動・環境教育などの「余暇生活文化」の充実があるといえよう。2006（平成 18）年 11 月の西宮市市民満足度調査結果報告書では、居住年数が「10 年以上」居住している人が 7 割を超え、「20 年以上」でも過半数を占めている。その調査項目中、「人と文化をはぐくむ生涯学習のまちづくり～教育・文化・スポーツの充実～」の「社会教育の充実」や「市民文化の創造」や「スポーツ・レクリエーションの振興」についての満足度は、すべての項目で『満足』が『不満』を上回っており、特に「図書館活動の推進」は約 4 割、「芸術・文化活動の振興」は約 3 割と高い。また、「活力ある産業の振興」についての満足度は、「都市型観光の振興」で『満足』が約 3 割と他の項目よりも高くなっている。<sup>2)</sup>

1 甲子園短期大学  
Koshien Junior Collage

石川<sup>3)</sup>は「生活文化は、あくまでも個々人が『自らの生命の持続を支えるための活動』の中から生み出されたものでありそれが集団的に支持され、世代的に継承されたものという意味である」と述べている。「生活文化」と呼ばれるものの具体的内容を列挙すると(1)非形象的生活文化(土着思想、国語・方言、土着信仰、生活の知恵、技能・芸能・舞踏等)、(2)形象的生活文化(化粧、民謡、工芸品、道具、工具、建造物等)、(3)制度的生活文化(行動様式、日常的慣習、マナー・エチケット、遊びに関わる慣習、関係様式、地域・家族内における地位配分と役割設定、組織化の原理や集団の形、地域共同体構成の形や運営方法、種々の集団等)と整理される。

人間の生活時間は「基礎生活時間」「社会生活時間」「余暇生活時間」の3種に分類されるといわれる。<sup>4)</sup> その中でも人生の質に大きな影響を与える余暇生活時間に関連する生活文化を「余暇生活文化」と呼ぶこととしたい。

そこで、西宮市及び阪神地域における「余暇生活文化」を調査することによって、今後の地域共同体としての大学やNPO団体の連携のあり方を探りたいと考えた。2009(平成21)年度よりスタートした“参画と協働の推進”をテーマに掲げる「第4次西宮市総合計画」、この中に市民が市内の魅力を見出すとともに、多くの人々が訪れ、魅力を感じることでできるまちを目指し「人々が楽しく交流する元気なまち」になることを謳っている<sup>5)</sup>が、最終目標は地域の大学として、あるいは筆者が運営している地域団体の新たな地域貢献方法の開発である。そのために、まずは西宮市及び阪神地域における「余暇生活文化」の歴史的背景を、今回偶然入手することができた大正時代に発行された遊覧・旅に関する古書(以下遊覧書と表記)から分析する。

## 2. 研究方法

1890(明治23)年軌道条例制定後、道路上の軌道に電車を運行する電気鉄道が相次ぎ開業、この時期の大阪市を中心とした人口集中は、交通革命をうながした。1903(明治36)年の大阪市街電鉄、1905(明治38)年の阪神電気鉄道、1907(明治40)年の南海電気鉄道による難波-和歌山

間全線電化、1910(明治43)年の箕面有馬電気軌道(現在の阪急電鉄)、兵庫電気軌道(現在の山陽電鉄)、京阪電気鉄道、1912(明治45)年の大阪高野鉄道(現在の南海高野線)による汐見橋-長野間における電車併用運転の実現、1914(大正3)年の大阪電気軌道(現在の近鉄奈良線)など、市内連絡ないし都市連絡電気鉄道が相次いで開業した。<sup>6)</sup> 参考までに現在の鉄道会社名での位置図はホームページで参照可能である<sup>註1)</sup>。

阪神地域では、阪神電気鉄道が1905(明治38)年4月、大阪出入橋-神戸三宮の都市間を結ぶ鉄道として開業した。続いて箕面有馬電気軌道は1910(明治43)年3月、現在の神戸市交通局である神戸電気鉄道は1911(明治44)年4月に開業、これを契機に、以降昭和戦前期にかけて、阪神地域は優良な郊外住宅地および遊覧地として喧伝され発展した。阪神電気鉄道は、鉄道事業の拡大のために沿線の土地開発や貸家経営を積極的に行い大阪や神戸などの大都市からの移住を推奨した。そのためのPR誌として『郊外生活』を発行し、園芸趣味や六甲山登山、風光明媚で教育環境のよい健康的な郊外での生活を提案した。その結果、銀行や商社、大企業に勤務する会社員貿易商、事業家などの多くの富裕層が阪神地域に移住し新しい郊外住宅地を形成した。<sup>7)</sup> こうした状況のもとで、大阪北部において郊外鉄道の建設を進めていた箕面有馬電気軌道にとっては、阪神間に対する出遅れを取り戻すべく、開通前の1908(明治41)年に『最も有望なる電車』、翌年には『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋を選ぶべきか』と題するパンフレットを出版し、沿線住宅案内を開始している。<sup>8)</sup>

上述の様な社会的状況を背景に、本研究では、大正期の遊覧書から特徴を分析し、遊覧・娯楽地としての阪神地域の成り立ちを考える手掛かりとすることを目的とする。今回は表1の5冊を比較研究する。本研究で遊覧書の検索および入手を試みたところ、本研究で採り上げた5冊が入手可能でそれぞれ特色があったため、それら5冊全てについて分析し、比較研究を行なった。なお、遊覧書からの引用に当たっては、内容を分かりやすくするために、現代仮名づかいに一部改め、句読点等の追加を行った。

表1 遊覧書一覧

	書名	著者	発行所	発行年	対象地
1	近畿五大都市中心 日がへりの旅路 附 とびとびの遊覧	市井史・ 水島爾保布	三宅荘蔵書店 三精堂書店	1919 (大正8) 年 10月	東=富士山～西=宮島 北=金沢～南=和歌山
2	近畿名所 一日の遊覧	野田文六	立川文明堂	1920 (大正9) 年 9月	東=伊勢～西=姫路 北=琵琶湖～南=和歌山
3	近畿遊覧 一日がけ と泊りがけ	近畿遊覧社	三宅荘蔵書店 三精堂書店	1921 (大正10) 年 10月	東=名古屋～西=宮島 北=山陰～南=琴平
4	近畿の旅 近畿遊覧 楽しみの	近畿遊覧社	三宅荘蔵書店 三精堂書店	1923 (大正12) 年 6月	東=名古屋～西=宮島 北=山陰～南=琴平
5	日がへりと泊りがけ	遊覧研究会 (野田文六)	國光堂書店	1926 (大正15) 年 4月	東=名古屋～西=宮島 北=東尋坊～南=琴平

### 3. 結果

#### (1) 遊覧書5冊の概要

##### 1) 『近畿五大都市中心 日がへりの旅路』

この書は市井史と水島爾保布の共著で、三宅荘蔵書店と三精堂書店の2社の共同出版である。初版発行が1919(大正8)年10月10日、再版は1919(大正8)年10月20日、その後10版を重ねている。大きさはポケットサイズで持ち運びに便利なようにつくられている。今回の5冊の中での違いとして、唯一ケース入りの書である。ケースの表面には、山に向かう入口に神社の鳥居、そこに向かう道なりに田んぼ・民家・休憩所・橋とのどかな風景がシンプルに描かれている。

本文ページ数は全534ページ、目次には52ページと「遊覧概図」2ページが割かれており、目次の占める割合が8.9%と高い。(表2参照) 文

中に「本編の索引は、発行所が非常な苦心と努力を費したもので、本書の特色として自負している所のものである。」と書かれている通り、まず各汽車電車の路線・駅名で索引でき、目的地別にも50音索引ができるようになっている。

内容は、近畿の五都市(大阪市・京都市・神戸市・奈良市・和歌山市)を中心として各地の遊覧地を紹介してある。サブタイトルに「附とびとびの遊覧」とあるように、「日がへり」のみならず、伊勢参りや天の橋立や富士登山まで紹介してある。

また挿書として、写真以外に名所の絵が20枚随所に挿し込まれているのも特徴である。これらは水島爾保布書と目次索引に記してある。

##### 2) 『近畿名所 一日の遊覧』

この書は初版発行が1920(大正9)年9月15

表2 全体ページ数に対する目次の割合比較表

書名NO.	全体ページ数 (本文ページ数)	目次ページ数【全体との割合】	再版数
1	586 (534)	52 + 「遊覧概図」2 【8.9%】	10版
2	575 (553)	22 + 「近畿の鉄道」図1 【3.8%】	10版
3	518 (504)	14 + 「遊覧概図」2 別に巻末に索引等37有り 【9.8%】	15版 4版
4	772 (750)	22 + 巻末索引等54 【9.8%】	記録無
5	665 (612)	23 + 30 (含「鉄道乗車規定適用」と写真) + 「遊覧概図」2 【8.0%】	

日、立川文明堂から出版され、再版は1922（大正11）年5月7日、以後10版を重ねている。本文ページ数は全553ページで、目次には22ページ割かれており、「近畿の鉄道」図も折り込みで入っている。

本書の特徴は、「大阪を起点とし一日の旅程を以て夫れ等の地を探らん人の為ニ筆を執る。」と書かれている通り、大阪駅中心に一日で行けそうな遊覧地を探す人のための書として発行されている。目次には駅名はなく、旅のルート別索引と目的地別索引との二本立てである。目的地別の項目として、神社・寺院参拝以外に、名勝と古跡、ユニークなところでは四季の花（梅・桃・櫻・さつきとつつじ・もみじ）や、温泉、海水浴という見出しもある。サブタイトルに「附 皇陵巡拝案内」とあるように、過去の天皇陛下のお墓参りが出来るようになっている。白黒写真がふんだんに用いられている。

### 3) 『近畿遊覧 一日がけと泊りがけ』

この書は発行が1921（大正10）年10月7日、近畿遊覧社著で三精堂書店から出版され、再版は1921（大正10）年10月15日、以後15版を重ねている。本文ページ数は全504ページで、目次には14ページ割かれており、「遊覧概図」も2ページ入っている。

はしがきには、「近年旅行が非常に盛んに成つて来た。」と書かれ、「本書は都会の人々が休日を利用して一日がけの旅行でもして見ようとする時の便りに編纂したもので、単に旅行者の正確なる道案内たる許でなく、汽車を待つ間の退屈しのぎ、又車中の無礼を慰める為や、ふとした通りすがりの名所旧跡を知る事にも役立つ様に驛や停留所を中心とし、他に一日がけの計量も附して置いた。名所旧跡の縁起等も興味のある様になるべく省かずに入れ、其外地理に関係のあるものをも努めて収集した」と書かれている。特にこの中の「一日がけの計量」というのが特徴で、例えば「甲山観音と清荒神（行程五里）【出発】阪神電車西の宮停留所二七四＝西の宮神社二七四＝…寶塚三〇二＝清荒神三〇二＝…【帰路】阪神急行電車中山停留所三〇一乗車＝」のように、名所旧跡を巡る旅行行程例を紹介しその距離と駅と名所の書かれている本文のページ数が示されているのは

大変親切で使用しやすいように思える。これが本文の冒頭に49ページも割かれている。巻末には歴代帝陵巡礼案内表や西國三十三所霊場一覧表、年中行事の栞、四季行楽索引、五十音名所索引も468～504ページの全37ページも割かれており、巻頭の目次と合わせると全体の9.8%にもなるのが大きな特徴である。

### 4) 『近畿の旅』

この書は初版発行が1923（大正12）年6月1日、近畿遊覧社著で三宅莊蔵書店と三精堂書店から出版され、再版は1923（大正12）年6月8日、以後4版を重ねている。本文ページ数は全750ページで、目次には22ページ割かれている。

この書の巻頭には「京阪神の地からする、暢やかな、気散じの『日かへり』と『一二泊』の旅を主眼とするものである。」と書いてあるが、「京阪神間所在の人にもみ限る訳ではない」と「他国の人々でも京阪神の地に遊んだ序の遊覧にも役立つ」とある。

この書も3)『近畿遊覧 一日がけと泊りがけ』と同様に読者に親切な内容となっており、巻末の「遊覧の栞」では前述の「一日がけの計量」のように、名所旧跡を巡る旅行行程例を紹介しその距離と驛と名所の書かれている本文のページ数が示されている。他に「御朱印を受けに」という項で、西國三十三所や四国八十八ヵ所以外の余りに知られていない札所を紹介するページも作り、巻末五十音索引12ページと併せて全53ページも割いてあり、巻頭の目次と合わせると全体の9.8%にもなる。

5冊の中でも写真や絵が大きく、色刷りのきれいな印刷で枚数も多く見やすくなっている。「遊覧概図」ということで、交通路線図が表紙と裏表紙の内側に見開きで入っているのも特徴である。

### 5) 『近畿遊覧 楽しみの日かへりと泊りがけ』

この書は初版発行が1926（大正15）年4月1日で、國光堂書店から出版され、再版記録はない。著者は遊覧研究会という団体が巻末には記してあるが、巻頭の序では2)『近畿名所 一日の遊覧』の著者である野田文六氏の経歴・書の特徴を紹介する文が2ページある。本文ページ数は全612ページで、目次には23ページ割かれており、30ページの「鉄道乗車規定適用」と写真、及び「遊

表3 現西宮市該当地域の遊覧地紹介比較

本	掲載内容と掲載量	割合
1	<p>【駅ごとで紹介】</p> <p>東海道線＝西の宮駅（P. 75－6行目～76－3行目）<u>約1P</u></p> <p>阪神電軌＝鳴尾・今津・西の宮東口・西の宮・香櫨園（P. 130－2行目～132－4行目）<u>約2P</u></p> <p>阪神急行電軌＝なし</p> <p>阪鶴線＝生瀬駅（P. 152－6行目～同－10行目）<u>5行</u> <span style="float:right">全約3P</span></p>	本文の 0.6%
2	<p>【旅のルート別で紹介】</p> <p>「1日のたび」の中の「武庫の海濱」＝（P. 252－1行目～270－ラスト）</p> <p>この中に武庫川河畔・鳴尾・百花園・福應神社・昌林寺・御前の濱・奮砲台・西宮神社・香櫨園・六甲苦楽園 の紹介有り。＝（P. 259－1行目～264－7行目）<u>約5P</u></p> <p>「1日のたび」の中の「武庫の山麓」＝（P. 271－1行目～281－ラスト）</p> <p>この中に「甲山登山」では廣田神社・神呪寺の紹介有り。＝（P. 272－1行目～276－1行目）<u>約4P</u> <span style="float:right">全約9P</span></p>	本文の 1.6%
3	<p>【駅ごとで紹介】</p> <p>東海道線＝西の宮（P. 147－3行目～同－6行目）<u>4行</u></p> <p>福知山線＝生瀬駅（P. 187－8行目～同－ラスト12行目）<u>5行</u></p> <p>阪神電車＝鳴尾・今津・西の宮・香櫨園（P. 273－10行目～275－7行目）<u>約2P</u></p> <p>阪神急行電車＝〔神戸線〕西の宮北口・夙川（P. 303－11行目～304－ラスト）<u>約1P</u></p> <p>〔西寶線〕西の宮北口・門戸（P. 306ノ1－1行目～同5行目）<u>5行</u> <span style="float:right">全約4P</span></p>	本文の 0.8%
4	<p>【駅ごとで紹介】</p> <p>東海道線＝西の宮駅（P. 151－10行目～P. 152－3行目）<u>6行</u></p> <p>福知山線＝生瀬駅（P. 287－11行目～P. 288－4行目）<u>6行</u></p> <p>阪神電車＝武庫川・鳴尾・今津・西の宮東口・西の宮・香櫨園（P. 536－1行目～538－11行目）<u>約3P</u></p> <p>阪神急行電車＝〔西寶線〕西の宮北口・門戸（P. 560－2行目～同9行目）<u>8行</u></p> <p>〔神戸線〕夙川（P. 561－8行目～562－9行目）<u>約1P</u> <span style="float:right">全約6P</span></p>	本文の 0.8%
5	<p>【旅のルート別で紹介】</p> <p>阪神電車線（P. 529～）の中に、武庫河畔の清遊～鳴尾～関西一の大グラウンド～百花園～西の宮～御前の濱・奮砲台・西宮神社・廣田神社・甲山・松原神社・香櫨園・六甲苦楽園の紹介がある。（P. 534－4行目～536－3行目）<u>約2P</u></p> <p>阪神急行電車（P. 539～）の中に、甲山詣り（P. 541－1行目～P. 543－7行目）や、「寶塚南口より西ノ宮北口まで」の中に、甲東園・門戸厄神（P. 554－4行目～同－8行目）の紹介がある。<u>約2P＋4行</u> <span style="float:right">全約4P</span></p>	本文の 0.7%

覧概図」が2ページ割かれている。

この書は、「大阪を中心として短時日に名所古跡を探らんとする人のために筆を取ったもの」と記してある。「鉄道乗車規定適用」について解説が詳しい。「改正対哩賃金表」（通行税用）までも載っているのはこの1冊だけである。この書も

駅中心ではなく、旅のルート別、神社・寺院中心で紹介されている。

#### （2）現西宮市該当地域の遊覧地紹介比較

次に、この大正期に発刊された5冊の遊覧書の中で、現在の西宮市該当地域の遊覧地がどれくらい紹介されているか、内容と掲載量を比較して表

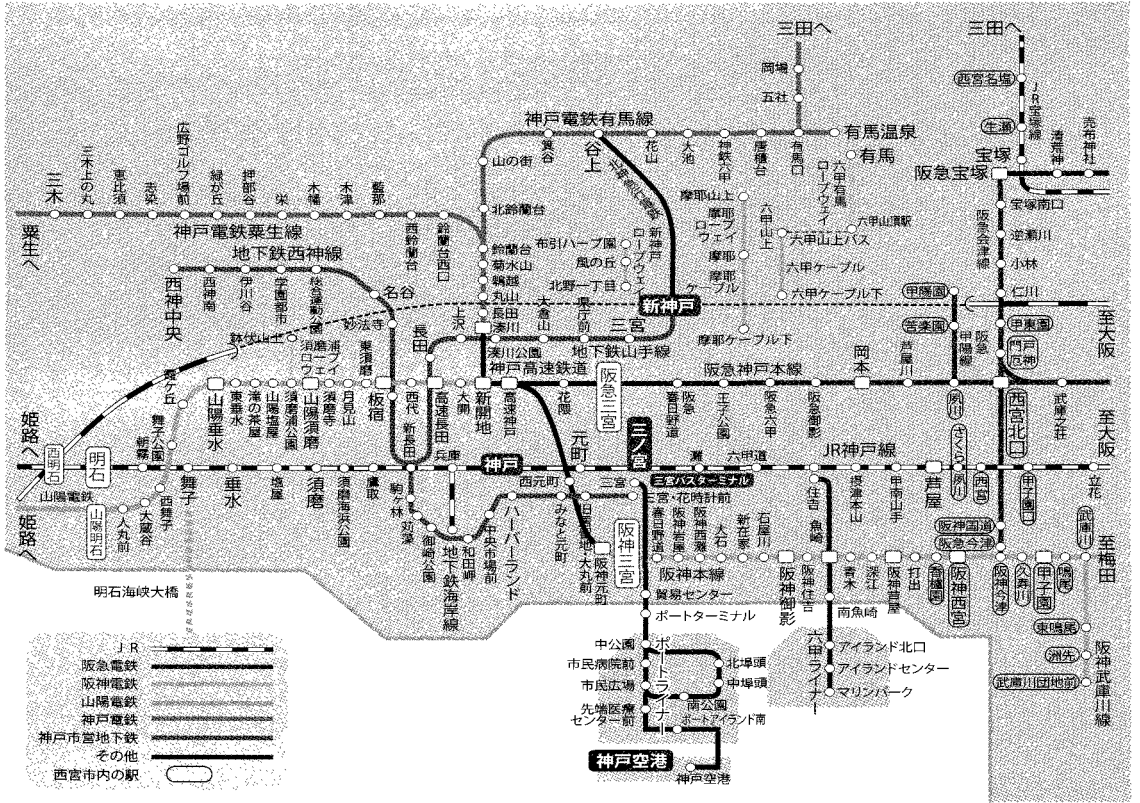


図1 阪神地区の鉄道路線図

出典：http://www.maruppo.com/access/tetudou.pdf#search

3に示し、図1では路線図で下記の駅の位置関係が分かるように示した。

表3の内容を詳しく分析すると、下記のような遊覧地が共通で紹介されている。

東海道線（現 JR 西日本の神戸線）では西の宮駅が、福知山線（現 JR 西日本の宝塚線）では生瀬駅から有馬温泉への道が紹介されている。

阪神電車では武庫川・鳴尾・今津・西の宮東口・西の宮・香櫨園の駅ごとに、武庫河畔の清遊・鳴尾・関西一の大グラウンド・百花園や、福應神社・昌林寺、西の宮・御前の濱・奮砲台・西宮神社・廣田神社・甲山・松原神社・香櫨園・六甲苦楽園などの遊覧地がどの書にも同じように紹介されている。

阪急電車では西寶線（現今津線）として西の宮北口・門戸厄神・甲東園の紹介が、神戸線では夙川駅が武庫の山麓として甲山登山や甲山詣りという項目で廣田神社・神呪寺の紹介がある。

### 4. 考察

大正期の阪神地域にとって、特に阪神電気鉄道の開業が、沿線地域の遊覧と娯楽施設開設を大いに促進したようである。1905（明治38）年には打出浜海水浴場開場、武庫川右岸に百花園開園、1907（明治40）年娯楽施設を備えた香櫨園開設、1919（大正8）年には鳴尾農業会と阪神電気鉄道の連携により、武庫郡鳴尾村（現西宮市）でイチゴ狩りも始まっている。イチゴ狩りは畑で食べ放題、砂糖、ミルク、お茶による接待と竹籠入りのイチゴの土産付で大好評であった<sup>9)</sup>という記載もある。これらの遊覧地と娯楽施設は、この時期に盛んに発行されはじめた上述の遊覧書で紹介されることによって、生活の中に余暇と娯楽を求める人々に人気を博したものと思われる。

阪神間は郊外居住の先進地であった。同時に大阪や神戸といった都会の人にとっては、繁く足を運ぶ通う身近な行楽地となっていったといえよ

う。阪神電車は特に優良な郊外住宅地とその周辺の遊覧地として宣伝してきた。<sup>10)</sup> 阪神電車は電気鉄道として神戸電気鉄道や箕面有馬電気鉄道に先駆けて開業し、都市として急激に拡大発展しつつあった大阪の人口を市外に拡散し郊外住宅地の形成に寄与するとともに、郊外からの労働者や遊覧者を収穫する役目をも担ったのである。<sup>11)</sup> このような社会情勢の中で、「日がへりの旅」「とびとびの遊覧」といった言葉で近畿各地の人々を遊覧地に導き、大阪からの遊覧客・行楽客も引き寄せたのではないかと思われる。この時代の遊覧書の特徴として、近畿各地の人々が京阪神の遊覧時に役立つように、日帰りまたは1泊の旅の際、電車の路線・駅名で索引できるもの、旅のルート別索引や目的地別索引ができるものであった。また神社・寺院参拝以外にも遊覧地と娯楽施設の紹介も多い。社会的背景と経済的事情がうまく絡み合っただけで遊覧書の再版ラッシュとなったともいえる。

## 5. 結語

20世紀初頭は、まさに郊外のユートピアが東京などの中産階級・ブルジョワを中心とする市民層共通の認識になった時期であった。この時期に郊外生活の開発が行われたが、それらは日本においては理想家や知識人が推進者となったのではなく、郊外電車の経営者によって実現されたのである。また、関西地方においては郊外電車のめざましい発達を媒介として、ヒト、モノの輸送だけでなく、ひろく文化=情報、生活、レジャーなどを包みこんだ交通文化圏が形成されたといえよう。<sup>12)</sup>

今回分析した遊覧書で紹介されていた現西宮市の遊覧地と娯楽施設は、今は既に消滅してしまっているものも多くある。鳴尾イチゴのように地域と教育機関の連携で再生の仕掛け作りがなされているものもある。香櫨園浜（御前浜）の保全も環境教育と結びついて小学校で地域の子どもの取り組みとなっているという例もある。

消滅したままで地元地域住民にも忘れられている昔の遊覧地や娯楽施設のルーツを調査し、地元ならではの文化を見直し、社会資源として活用し、地元地域住民の余暇生活の活性化につながるような仕掛けづくりのきっかけを今後も探していきたい。

## 註

註1) <http://www.osakaorikomi.co.jp/price/images/rosenzu.pdf#search>

## 引用・参考文献

- 1) 西宮市政ニュース第1317号、西宮市役所、1、2009年4月10日
- 2) 西宮市市民満足度調査結果報告書、西宮市、2006年11月
- 3) 石川実・井上忠司編、生活文化を学ぶ人のために、世界思想社、9-11、1998
- 4) 一番ヶ瀬康子・蘭田碩哉編、余暇と遊びの福祉文化、明石書店、41-43、2002
- 5) 西宮市政ニュース第1317号、西宮市役所、2、2009年4月10日
- 6) 竹村民郎、笑楽の系譜－都市と余暇文化－、同文館出版、122、1996
- 7) 永藤清子、阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成、甲子園短期大学紀要第26号：13-20、2007
- 8) 安田孝、郊外生活の形成／大阪一田園都市の夢と現実、INAX出版、14、1992
- 9) 永藤清子、阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成、甲子園短期大学紀要第26号、13-20、2007
- 10) 橋爪紳也、京阪神モダン生活、創元社、28-29、2007
- 11) 永藤清子、阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成、甲子園短期大学紀要第26号、13-20、2007
- 12) 竹村民郎、笑楽の系譜－都市と余暇文化－、同文館出版、134、1996

（受付：2010年3月29日）  
（受理：2011年1月24日）